

金融資本の検討（下）

小 牧 聖 徳

一 序

二 従来の見解

三 方法問題（以上前号）

四 一般的性格（以下本号）

五 運動形式

四

資本主義を世界資本主義として把握し、その中で金融資本を把握する場合に、金融資本の世界的、一般的原理が明らかにされ得るといわなければならないが、金融資本の一般的原理の究明においてその基盤をなすものは、社会的基礎条件である。いわば資本主義の独占段階という基盤は、金融資本の検討にかんしては基礎的前提条件をなす。独占段階への突入は世界資本主義を全体としてみれば、十九世紀と二十世紀の分岐点に見出すことが出来る（帝国主義論、堀江訳二九頁）。もとより世界資本主義を構成する個々の資本主義国の社会的、歴史的事情により、独占段階へ入るに至るまでの資本主義の発展のテンポは一樣でなく、ある国では飛躍的躍進をとげ（たとえばドイツ、アメリカ）、他の国では着実ではあるが緩慢な発展をたどった（たとえばイギリス、前掲書一一七頁）。けれども世

世界資本主義全体として、独占段階へは二十世紀にうつる前後に入ったものといえる。したがって世界的、一般的基盤のもとでの金融資本の一般的原理の究明は、時間的には十九世紀末から二十世紀初頭にまで遡求することが必要となる。これは世界資本主義を構成するイギリス、ドイツ、アメリカ等の金融資本を究明する場合にも、その時点までは歴史的遡求を必要とすることを意味するが、それによって世界資本主義における金融資本の端緒とイギリス、ドイツ、アメリカ資本主義における金融資本の歴史的端緒の時間的同一性に到達するわけであり、この点にかんしては各金融資本の特殊性と、その金融資本としての一般性は統一されたものとして理解することが出来る。

世界資本主義のこのような動向のなかで、金融資本の形成発展過程は、社会的には生産の集積、集中による産業資本における独占の形成と、それを援助した銀行資本との結合状態のなかにみられることとなる（前掲書六五頁）が、金融資本は産業資本の側面をもつが産業資本そのものではなく、銀行資本の側面をもつが銀行資本そのものでもなく、両資本の統一体として把握されることとなる。ところで産業資本が巨大産業資本として発展する過程において、銀行資本や株式制度の利用なしには産業資本の飛躍的發展は不可能であったといえるが（P. M. Sweezy: *The theory of capitalist Development* p. 260 中村訳三五四頁）、銀行資本や株式制度の果たした役割は偉大であったとしても、巨大産業資本の基礎は生産資本であり、生産の場の拡大発展を基盤として、かかる拡大発展を可能にした主体的条件として、金融を担当する銀行資本が結合して、両者の統一が金融資本として把握されることとなった。したがって金融資本は産業資本であるとともに銀行資本の側面をもつこととなったわけであるが、銀行資本と産業資本との結びつきの在り方によって、独占を基盤としつつ異なった型が、たとえばドイツ型といわれる

ものとアメリカ型といわれるものがあらわれるが、基本的には独占資本として国内の領域にとどまらず、海外領域へも進出する必然的傾向をもつ (M. Dobb: *Capitalism Yesterday and Today*, p. 30)。

金融資本を形成することとなる産業資本・銀行資本は、その主体的条件であるが社会的条件は独占である。したがって金融資本は独占資本であるが、独占をもたらす要因として競争と信用があげられる(資本論、長谷部訳4、一三二頁、日評版)。産業資本は競争と信用によって資本集中を実現するが、銀行が資本集中過程に主体的に加わって産業と銀行の結合による金融資本が成立する。この競争は、資本主義の成立以来、独占の段階に至ってもなおかつ一貫して作用する社会的圧力であるが、競争の背後には競争をもたらす動機としての資本の利潤追求がある。利潤追求を動機とし、目的として相互の競争が生じ、競争の結果として、大規模生産により商品価格を引下げ得る大資本が、小資本に打勝ち独占状態が生ずるが、独占状態といえども利潤増大を達成するための手段としての位置にあり (M. Dobb: *Capitalism Yesterday and Today*, p. 26)。独占そのものが目的なのではない。利潤を目的とする競争過程で独占が形成され、独占は高利潤を保障することとなるが、独占への競争過程において信用は、競争に打勝つ為の手段として利用される。競争に打勝つことによって大企業は高利潤を入手し、他方では他企業を没落させてその社会の独占化への道を切りひらくこととなるが、信用利用を手段として、かかる成果がもたらされるのであり、したがって信用は競争過程で利用される手段にすぎない。競争を前提として、かかる過程で信用が利用されるのであって、競争と信用において基礎をなし前提をなすものは競争である。両者はいずれも独占に関与するけれども競争は資本の集積・集中・独占をもたらし、競争はまた信用を利用するが、信用は競争によって引き出されるところの、独占をもたらす手段にはかならない。信用が利用され、結果として社会的には独占が形

成される根源は競争であり、競争を招来する動機は利潤追求のうちにある。いわば高利潤追求の手段として技術的には信用が利用され、社会的には独占が成立するのであり、信用と競争とは、独占にかんして緊密な関連のもとにあるとはいえ、根源的には競争が信用利用を通じて独占をもたらし、その独占が金融資本成立の社会的条件をなすのである。^(註)

（註）「競争的闘争それ自体が集中の動因となる」(P. M. Sweezy The Theory of Capitalist Development p. 256 中村訳三四九頁)。「これとは異なったやり方で集中を促進するいま一つの力がある。これは信用制度である」。「信用制度による集中はその発展した形態においては大資本家による、小資本家の収奪を意味するものではなく、(傍点、小牧)すでに形成された、または形成されつつある多数の資本の融合が株式会社形成という、より円滑な方法によって行われることを意味する。これは生産の規模を拡大するもつとも急速な方法である」(Ibid. p. 256 中村訳三四九頁)として競争による集中と信用制度による集中を取奪の有無によって区別しようとしている。しかし集中を結果する信用制度は「やがては競争、戦上の新たな恐るべき武器となり、そして結局は諸資本集中のための歴大な社会的機構に転化する」(傍点、小牧)（資本論、長谷部訳4、一三一頁、日評版）のであり、競争戦上の武器としてあらわれる限りは、競争を前提とし、競争過程で勝つ為の手段として利用されるのであって、信用制度利用をもたらす根源は競争にあるといわなければならない。競争と信用制度を資本集中の別個の要因としてではなく、競争を基軸として信用制度が利用されて集中が実現するものと解すべきである。

これに対し、独占の形成に協力することとなる信用は、当初は企業間に発生する商業信用として出現し、信用関係を表示する用具としては商業手形の形態をとり、商業貨幣として流通過程で機能した。後に商業信用を表示する商業手形は、貨幣取扱と貸付の統一の遂行体として出現した銀行によって代位されて、銀行信用貨幣となり、貨幣代用物として機能し、銀行の発行する信用貨幣が一國通貨の中心的位置をしめるに至った。信用の発展とくに銀行信用貨幣の出現によって、貨幣資本の供給が、高利貸の手から近代銀行にうつり、貨幣取扱と貸付の統

一的遂行体である近代的銀行は、信用制度の中心として信用貨幣を発行して金利低下をもたらし、産業資本・商業資本の発展を促進する立場に立つこととなったのである。こうして資本主義社会の貨幣的基盤は、近代的銀行業の出現にともなう銀行信用貨幣の出現で整備されることとなり、かかる基盤の上で産業資本・商業資本は、商業手形や融通手形を媒介として銀行信用を利用して商品生産、商品取引を拡大し、資本の蓄積を遂行し、また貨幣取扱と貸付の統一的遂行体で信用制度の中心をなす銀行は、貸出および貨幣取扱操作によって産業資本・商業資本の資本蓄積過程に協力し、それを促進させたのである。

このような銀行信用貨幣の流通、発展のもとで、企業の資本集中の手段として、信用制度の今一つの側面をなす株式制度が出現し、産業資本は株式を発行して貨幣資本を集中し、大規模生産体制をとのえた。銀行は株式制度による産業資本の資本集中に、直接、資本を投下したり、あるいは間接に株式市場で株式を売買したりして株式制度の発展に参加し、株式利用による産業資本の大規模化に援助を与えるとともに、他方ではみずから貸出の形態で産業資本に融資をつづけたのである。銀行側からの株式、手形を媒介としての資金の供給は他方では、企業側でかかる資金の入手により、競争戦を有利に勝ち進み、資本の集積・集中と、それにとまらざる生産の増大によって独占が形成されることとなったが、独占段階のもとで産業資本は、銀行資本と極めて密接な関連のもとにおかれ、産業資本とは異なったものとして金融資本が出現することとなったのである。

産業資本は銀行制度を利用して、さらに株式制度を利用して資本集中を実現し、株式制度を含めて信用制度は資本集中に貢献し、独占の形成を促進した。

(註) 「信用制度とはたんに銀行ばかりでなく、投資業者、証券市場等々の全金融機構をふくむ広い意味に理解すべきである」

(P. M. Sweezy : The Theory of Capitalist Development, p. 256 中村訳三四九頁)

信用制度の中心である銀行は、企業の資本集中過程で融資をおこなったり、また株式を直接買入れたり、株式市場に資金を投入したりして、株式制度の発展に協力するとともに、銀行自身もまた、株式組織となることによって、その規模を拡大し、産業も銀行も、その企業形態は株式組織となる方向へ進んだ。株式制度の出現によって資本集中体制が一層推進められることとなったが、銀行はそのはじめは、産業のひかえめな助手として経済過程に入りこみ、産業資本・商業資本の蓄積資金を取扱う微々たる機関として出現したが、後に株式制度の出現によって資本集中体制が一層推進められるとともに、みずからも株式組織となり、資本集中の社会的機構として、社会のあらゆる層の貨幣や貨幣資本をかき集めて産業資本に投下し、産業資本の集中過程を促進し、また、株式の流動化に協力して、株式制度を助長、発展させる作用を果すこととなったのである。

株式制度となった産業・銀行のもので、株式は擬制資本として現実資本とは異なった独自の運動をするとともに、株式はその所有者によって企業支配の道具として利用され、企業結合をもたらす用具となる。しかし株式の運動（発行、流通）に際しては必然的に貨幣資本の運動をともなうわけであり、この貨幣資本の運動には、銀行による貨幣取扱や資金の貸付が不可分的に結びついているといわなければならない。すなわち銀行の貨幣取扱操作は株式の売買にともなって必然的に必要とせられるし、さらにまた株式獲得に必要な資金も銀行によって貸付けられるなどして、株式取引への銀行の関与は不可避であるとともに、不可欠であるといわなければならない。

しかしながら貨幣資本の運動をともなって運動する株式も、その保有を通じて他企業支配を可能ならしめ、トラスト、コンツェルンの形成の不可欠の用具となる。それ故、金融資本成立の重要な要素として株式制度がとり

あげられ、とりわけ参与制度による企業支配体制が強調されることとなったのである。株式保有による他企業の支配や企業間の相互的結合は金融資本の重要な側面をなしているが、株式は元来、現実資本の運動に影響されるがそれ自体、独自の商品として現実資本とは別個に独自に売買される商品である。しかし商品として運動する限りにおいては、株式は価値そのものである商品と同様、通貨を媒介として運動することならざるを得ない。通貨を媒介として運動する点に現実資本としての通常の商品と、擬制資本としての株式の同一性が見出されるわけであり、このことは、両者ともに通貨の媒介を不可避的に必要とすることを意味している。しかも通貨は銀行によって取扱われ、銀行によって貸付けられて貨幣資本として運動するわけであるから、擬制資本である株式も現実資本である産業資本と同様、銀行資本と不可分の関係にあるといわなければならない。ただ株式はその取得者に株主権をもたらし、企業支配の武器となる点、株式所有にもなる特異性といわなければならない。しかし企業支配のための株式取得に際しても、取得にもなる株式の移転と反対方向への通貨の運動を不可避的、必然的にもなうことは注目されなければならない。しかも通貨の運動は株式の運動のほかに、金融資本にとつてのより基礎的な条件である現実資本の運動とも、不可分に結びついているわけであり、したがって貨幣資本の運動は、金融資本にとつては基本的な条件をもつわけである。株式は、かかる基本的条件のもとで、金融資本形成にとつては補完的作用を果す位置にあるわけであり、金融資本は産業資本と銀行資本とを主体的条件として、株式制度を補完的条件として成立する巨大結合資本であるといえる。

ところで銀行資本と産業資本との結びつきは、銀行より特定企業へ銀行融資が増加供給されることにより、また銀行が特定企業の株式を多額に保有することによって結合の度合が深まるが、このような銀行よりの投資、融

資による貨幣資本供給は、銀行↓産業を経て産業↓銀行へと円環運動を描く。すなわち銀行が社会のあらゆる貨幣や貨幣資本をあつめ特定有望企業に投資または融資することによって、その企業はその資金で設備の拡大を実現し、あるいは弱小企業の合併、吸収にこのような資金を支出する。支出された資金は銀行の貨幣取扱操作によって、特定企業から他企業へ設備購入代金として、あるいは買収代金として振替えられ、銀行とあらたな他の企業との間に産業↓銀行という経路での資金関係がつくり出されることとなる。当初、特定銀行と特定企業間に成立した銀行↓産業への資金の流れは、特定企業の手から離れても再び特定銀行へ回流することによって、銀行を中心とする結合体制が資金的に成立することとなる。かかる過程の反復のなかで設備改善、あるいは他企業への支配力を拡大する企業の出現とともに、かかる企業を含めて多数の企業と銀行との間に資金的にも恒常的関係を生み、そのうちで特に緊密な関連のある企業と銀行相互間での人的交流にまで発展するに至るのである。

特定銀行より発して産業へ向うのとは逆に、イギリスにおけるが如く、産業の側での蓄積が長い歴史的過程の中で進展していた場合でも、事態は変わるわけではなく、産業の蓄積資金は銀行へ流入し、産業の拡大のために支出される資金は銀行より流出して再び手持をかえて銀行によって取扱われ、銀行資金を形成することになる。銀行はその資金を国内領域に振向けるとどまらないで、国内で成立した独占的産業のために、商品輸出を促進させるべく海外に資本輸出を行い、あるいは有利な投資収益を目ざして資本輸出をおこなう。したがって産業と銀行の結びつきは、銀行↓産業の方向からはじまっても、あるいは産業↓銀行の方向からはじまっても、資金が円環運動をたどることによって同一結果をもたらし、国内市場の支配を強め、さらに産業は結合の範囲を外へ外へと拡大し（企業結合はその一方法である）、銀行は結合外部から資金をより多く吸収して（創業利得もその一方法である）、

結合体の拡大強化に利用し、国内市場の独占体制を強化、拡大するのみならず、より有利な分野を旨ざして資本は海外にまで進出する。産業資本と銀行資本との結合のもとで国内のみならず国際的領域にまで支配を拡大する金融資本は、単なる産業資本でなく、単なる銀行資本でもなく両者の統一体なるが故に、海外への進出も、その一面としての銀行を利用することによって一層促進され、それが他の側面である産業資本の商品輸出や海外進出への道をひらき、両者一体となって世界的領域にまで支配力の拡大に向うのである。銀行資本と産業資本との融合、癒着のもとで成立して、国内的に独占体制を確立し、海外へも進出して、より大なる利潤を追求するとともに金融資本の金融資本たる所以がある。^(註)

(註) なお株式制度やその企業的発現としての株式会社は、金融資本成立の条件をなしているが、株式会社そのものが金融資本ではなく、株式会社を企業的條件として成立する独占的産業資本、独占的銀行資本の結合が金融資本であり、株式会社は金融資本にとっては一つの条件をなすにすぎない。企業形態としての株式会社、企業結合形態としてのカルテル、トラスト、コンツエルンは、金融資本を企業形態、企業結合形態の面から、いわば組織的側面から把握したものである。しかし金融資本の現象はこのような組織形態をとるとしても、その本質は巨大結合資本であり、その現象は企業形態や、企業結合形態を含めて極めて多様であるといわなければならない。

この結合資本の支配力増大の方法として成立するトラスト、コンツエルン等は、株式保有を媒介として成立する結合形態であり、かかる結合形態は、株式を用具として利用するが、株式の運動は貨幣資本の運動を不可避的にもたうこととなる。したがって企業結合も、貨幣資本の運動、したがって銀行における貨幣取扱操作と不可分の関連をもつのであるが、貨幣取扱操作のみでなく、銀行の貸出によって、かかる結合が促進されさえするのである。したがって企業結合も貨幣取扱と貸出の統一的遂行体である銀行資本と不可分の関連に立っている。

五

金融資本における産業資本と銀行資本との結合は資金的・人的結合であるが、結合の基礎をなす資金的結合は、資金循環のなかで円環的に成立する結合であり、産業の貨幣資本が銀行へ流入し、銀行の貨幣資本が産業へ流入し、それが産業資本と銀行資本との相互間に反復されることによって、一結合体を成立させ、結合体内では資金的結合が、人的交流をももなった結合にまで進められてゆくこととなる。

結合の外にある銀行や企業も、結合体に吸引されて、その支配下に立つことによって、その結合体をより一層大規模なものたらしめるが、結合体に敵対しようとするものは結合から排除されて苦境に立ち、さらに没落過程をたどることとなる。

かかる結合の内部では銀行、産業相互間での投資、融資にもとづく資金の交流が網の目のようにみられ、銀行↓銀行。銀行↓産業。産業↓銀行。産業↓産業の資金の流れのなかで、その結合体による生産領域の支配を拡大強化しようとし、その支配を可能にするために銀行は、結合の外からも出来るだけ多く資金を吸引して、それを結合体に用立て、また結合体の内で形成される余裕資金を結合体による支配の拡大強化のために、国内はもとより海外にまで投下する。ここに基盤としての生産資本、したがって産業独占資本と、それを基盤とし、それを援助し強化するものとして銀行資本が加わり、資金的・人的に相互交流を深めることによって、金融資本が成立発展する。

したがって金融資本は銀行資本より産業資本への金融（投資・融資）のみでなく、産業資本より銀行資本への金融（投資・預金）をも含み、これら両者の交流的な金融過程のなかで、産業は銀行を、銀行は産業をより一層拡大発展させ、一体となって国内市場を支配するだけでなく、海外市場への進出をはかることとなるのである。した

がって産業と銀行との結合は、産業を中心とした結合、銀行を中心とした結合の両者を含むのであり、いずれか一方の型のみが結合を示すわけではない。結合過程の進展の中で相互に作用し合つて拡大発展をたどることとなるのである。

支配の拡大は螺旋的円環運動の中で、国内から海外へ向うのであるが、その結合の中心部門は結合体全体に対する支配力を株式保有および融資、または預金関係を媒介として保持し、その中核をなすものが結合体の支配者であり、金融王である。

かかる金融資本の運動形式は、産業資本と銀行資本の両者を結合し、株式制度を補完的条件とした、産業資本でもなく、銀行資本でもない独自のものとして表示されることが必要である。

この金融資本の運動形式としては $G-G-W \dots P \dots W'-G'-G'$ において示すことも出来る。これは産業資本を包含した銀行資本として、いわば銀行資本から出発し、銀行資本に復帰する銀行優位の金融資本を表示し、ヒルファーディングの明らかにした金融資本の運動 $G-G'$ (Finanzkapital s. 296 岡崎訳(中)一四頁)に照応するが、また利子生み資本における利子の源泉をも明らかにすることが出来る。またこれに対し $(G-W) \dots P \dots W'-G'-G-G-W \dots P \dots$ は産業資本から出発し、回収された貨幣資本が銀行を経て再び産業資本として循環することを示していて、レーニンの定義に則した金融資本の運動形式といえよう。ただしレーニンは金融資本をまず生産の集積、集中、独占から説き起し、それにつづいて銀行資本との結合をのべて、海外への資本輸出に説き及んでいたのであり、生産から出発し、生産に基礎を据えている点は、ヒルファーディングが貨幣資本による金融に目をうばわれて、金融資本と命名し、銀行優位の金融資本を説くこととなつたのと対照的であるといえる。

この両者を円環運動としてとらえることによって、銀行優位、産業優位のいずれをも包含し、金融資本としての各国の特殊性を一般化することが出来るのであり、それが

ことが出来る。 $G \cdots P \cdots G$ は産業資本の運動形式を略記し



たものであるが、そこで生じた貨幣

資本が銀行 B へ流入し、銀行の手を経て再び産業へ回流し、産業資本として運動する。一面では産業資本であるが、他面では銀行へ流入し、銀行から支出される銀行資本でもある。かかる運動を示すものとして金融資本は、産業資本を基盤とするが産業資本そのものではなく、銀行資本の側面をもつが単なる銀行資本でなく両側面を具え、円環的に運動する資本として把握出来る。そして産業資本の $G \cdots P \cdots G$ の拡大発展によって生産の集積を実現し、増大した資本は銀行を経由して再び生産の拡大に投せられる。

右の円環運動によって、その中をかけ廻る G は累積的に増大し、円環内部へ内環運動の外部から出来るだけ多く G を吸引することによって、円環によって表示される結合体をいよいよ大規模なものとする事となる。



は銀行より産業へ或は逆に産業より銀行への貨幣資本供給に際して、株式 A が取得されるとともに貨幣資本の運動をともなつて、運動することを示している。そして A は擬制資本とし

て現実資本とは離れて独自に運動するが、円環運動の過程で、貨幣資本の運動をともないつつその所有によって、結合体を支配し得る位置にあることを示している。

$\cdots P \cdots G \rightarrow B$ は歴史的には、イギリスにおけるように、産業資本の蓄積の増大によって、産業から銀行へむ

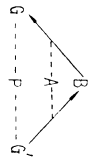
かう貨幣資本の流れを示し、また発展した独占段階のアメリカにみられるように、自己金融の結果として、産業より銀行へ貨幣資本が流入しているのを示している。次の $B \rightarrow G \cdots P \cdots$ においては、銀行より発した貨幣資本

が産業資本の拡大発展を助長することを示すもので、ドイツにおける金融資本はかかるものからその運動を開始し、独占を形成さすこととなった。かくしてイギリスでの産業資本の蓄積の増大にもとづく金融資本形成運動を示すものとしての $P \dots G \rightarrow B$ は、ドイツでの銀行融資にはじまる独占的産業資本の形成運動を示す $B \rightarrow G$ $\dots P \dots$ を経過して、より高い段階では、再び元の $P \dots G \rightarrow B$ へ回流し、この段階ではアメリカでの自己金融の増大による産業より銀行への貨幣資本の流入を示すものとして、イギリス的段階より、一層高次の段階で運動形式としての同一性を持ちつづける。金融資本はこのような円環運動をたどる中で、累積的にその規模を拡大し、支配力を増大してゆくこととなるのである。

このように金融資本の運動形式は結合内の円環的資金循環運動としてとらえることが出来るが、この結合に銀行の活動によって結合外の貨幣資本が追加されて円環運動で示される結合体の規模は、さらに拡大発展する結果となる。

結合体の外からの貨幣資本の流入のほかに、結合体の内で運動する G は、より高い利潤率を求めて銀行を通じて海外投資に振向けられる。それによって海外からの利子収入が吸収されて、結合体を大規模化するほか、資本輸出によって外国に購買力を与えることにより、結合体内の生産品の海外輸出を促進し、また資本輸出国が輸出資本により現地で生産をおこない、現地の剰余価値を国内へ利潤として吸収するなどして、結合体をより一層、大規模にし、国内のみならず海外の支配をも実現することとなる。

すなわち金融資本の独自の運動形式にほかならない。

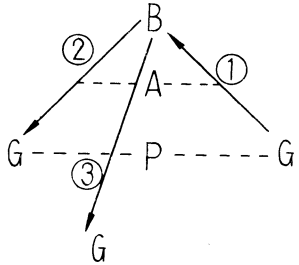


はかかる活動をする資本結合

この運動形式は金融資本の一般的運動形式として、ドイツ、アメリカ、イギリスをはじめ、各国金融資本の運

動形式にも等しく当はまるものといわなければならない。運動の出発点が銀行資本からはじまるか、あるいは産業資本からはじまるかは、金融資本成立の各国の歴史的、社会的事情によって、同一ではないとしても、一度びその運動がはじまるや否や、円環運動の中で同一運動をつづけ、資本輸出の方向をたどらざるを得ないのが、金融資本の運動の不可避的動向であるといわなければならない。

金融資本に加えられる国家資金による援助は、かかる円環運動の中に付加えられて、金融資本の規模を拡大し、金融資本の安全性と収益性を保証する作用を果すこととなる。



①は金融資本成立に至る過渡的段階での運動であり資本主義の典型と目されるイギリスでみられ、より発展した段階では自己金融をおこなうようになったアメリカ金融資本にもみられる。

②は金融資本の成立過程でみられた運動でドイツにその典型を見出すことが出来る。

このような運動の連続的な円環運動の進行過程で、産業資本でもあり、銀行資本でもあるといふ金融資本の二側面を示すこととなるが、さらに海外への資本輸出が生じ、

③は国内投資のみならず海外投資へ向う金融資本の運動を示すこととなる。金融資本内の蓄積資金はかかる経路から海外へ輸出されて、自己の属する結合体の支配領域を拡大し、収益を高めることになる。